

小学校音楽科「金管アンサンブル」の教材化

菅生千穂・矢島 正・阿久澤由佳
大島恵依子・富岡千春

群馬大学教育実践研究 別刷
第36号 207～219頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

小学校音楽科「金管アンサンブル」の教材化

菅生 千穂¹⁾・矢島 正²⁾・阿久澤 由佳³⁾
大島 恵依子⁴⁾・富岡 千春⁵⁾

1) 群馬大学教育学部音楽教育講座

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

3) 玉村町立上陽小学校

4) 藤岡市立藤岡第一小学校

5) 甘楽町立小幡小学校

“Brass Ensemble” as a Teaching Material of Elementary School Music Department

Chiho SUGO¹⁾, Tadashi YAJIMA²⁾, Yuka AKUZAWA³⁾
Keiko OSHIMA⁴⁾, Chiharu TOMIOKA⁵⁾

1) Department of Music Education, Faculty of Education, Gunma University

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

3) Johyoh Elementary School, Tamamura

4) Fujioka Daiichi Elementary School, Fujioka

5) Obata Elementary School, Kanra

キーワード：小学校音楽科，金管アンサンブル，教材

Keywords : Elementary School Music Department, Brass Ensemble, Teaching Material

(2018年10月31日受理)

0. はじめに

本稿は小学校音楽科において、鑑賞を中心とした教材を開発する実践研究で、教員研修の制度である群馬大学教育学研究科長期研修院（音楽）のプロジェクトをまとめたものである。前回の「大須賀らとの木管五重奏による鑑賞教材開発¹⁾」に引き続き、今回は金管楽器によるアンサンブル（以下 金管アンサンブルと記す）を用いた。教材は、長期研修院参加の教員8名の協力を得て編曲、演奏を行い録画したものをパワーポイントにまとめて作成した。その後、中・高学年への汎用性を意識し菅生、矢島により作成した授業案の基

本形を、阿久澤、大島、富岡の3名の教員が授業実践し、検証を行った。

以下、平成29年告示の新学習指導要領²⁾に示された小学校音楽科の方向性、群馬県内の小学校音楽の実態等をふまえ、実践研究について述べ、考察する。

1. 実践研究の理由

(1) 新たな小学校学習指導要領における「音楽科教育」の方向性について

平成29年に告示された「小学校学習指導要領」は、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、教科等

における目標・内容の見直し、新しい時代に必要とされる資質や能力を育成する上での評価のあり方とともに、「主体的、対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善を主な柱として掲げている。言い方を変えれば、どのように社会とかかわりより充実した生き方を実現するかという視点からの「学びに向かう力や豊かな人間性」と、何を理解し何ができるようになるかという「学びから得た知識や技能」と、身に付けた知識や技能をどのように有効に活用するかに関する「思考力や判断力や表現力などの諸能力」をバランスよく身に付け、生活に生かしていくかという視点からの「学び」の改善ということができようであろう。

音楽科についても、『小学校学習指導要領解説 音楽編』³⁾では、この三つの柱立てで「教科の目標」「学年の目標」「内容構成」を見直し、再構築している。

具体的には、「見方や考え方」を働かせることによって、音楽科の学習を通して培う「資質や能力」を明確に示そうとする意図が伺える。この点は、他教科でも同様である。

小学校音楽科の目標は以下に示すとおりである。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性をはぐくむとともに、音楽に親しむ態度を培い、豊かな情操を培う。

(1) では「学びから得た知識や技能」を、(2) では「思考力や判断力や表現力などの諸能力」を、(3) では「学びに向かう力や豊かな人間性」を示している。

補説すると、(1) については「曲想と音楽の構造等との関わり」が「知識」に該当するが、これは児童が単なる音楽の要素を断片的に覚えることを示すものではない。「聴き取る」という知覚的な働きと「感じ取る」という感受的な働きとの交流の中で「知識」を獲得するという意味である。また、「技能」について

も、歌唱も器楽演奏も「思考・判断」と併せて行われる表現の「技能」を示している。

(2) については、児童が音楽表現を工夫し、どのように表すかという思いや意図を明らかにすることの重要性が示されていると理解できる。また、楽曲や演奏のよさなどを聴き味わって、自分にとっての音楽のよさを見出すことも重視されている。(1) との関連の重要性が高い。

(3) については、協働して音楽活動をするものの重要性が強調されているとともに、他者と共に音楽表現や享受を通して、文化の継承・発展・創造を支える態度の育成を目指すものとなっている。

これまでの小学校学習指導要領(平成20年度)の音楽科の目標は、

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

であるが、これと比較すると、より具体的で内容が明確化していることがわかる⁴⁾。このことから、「生活や社会の中の音や音楽と関わる資質・能力」を分析的にとらえなおし、それを学習の場において具体化し、児童の姿として具現化していくことが強く求められている。

また、「学年の内容」の構成は、次のようになっている。

「A 表現」(1)歌唱 (2)器楽 (3)音楽づくり
ア(思考力・判断力・表現力)
イ(知識)
ウ(技能)
「B 鑑賞」
ア(思考力・判断力・表現力)
イ(知識)

このことは、これまでの「関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」という構造分析ではなく、表現・鑑賞という二つの内容に、それぞれ「思考力・判断力・表現力」「知識」「理解」という三つの内容・要素を組み込ませている。

これからの小学校音楽科における学習指導は、こうした新しい枠組みを前提として構想されなければならないといえよう。

(2) 群馬県教育委員会の調査等からみる小学校音楽科学習の実態と課題について

平成30年度の群馬県教育委員会『学校教育の指針』⁵⁾に示されている「各教科等の指導の重点」の「音楽」の項では、①「イメージや曲想に合う表現方法を試しながら、表現のよさを実感させる」ことと、②「音楽を形づくっている要素や楽譜を手がかりにしながら、曲の特徴を捉えさせる」ことの二項目を掲げている。

①については、「音楽の授業では、音や音楽を通して子どもたちの思いや意図を引き出したり表現のよさを実感させたりすること」の重要性を指摘している。また、「言葉だけでなく実際に音や音楽を通しての振り返ることが大切」であるとしている。

②については、「子どもたちが感じ取ったことを生かして、音楽を形づくっている要素を手掛かりに音楽的な特徴を捉えさせ」ることの重要性を指摘している。また、「楽譜には、作曲者が表現したい様々な場面や様子、情景などが、音符や強弱記号、速度記号などによって示され」ていることを強調し、「楽譜から音楽的な特徴を捉える場を設定することは、音楽文化の理解を深めることにもつながる」と説明している。

このように、「指導の重点」でとりあげて強調しているということは、こうした点に「指導上の課題」があると思われる。

平成26年3月に刊行された指導資料『はばたく群馬の指導プラン(実践の手引き)』⁶⁾では、「音楽科では、音楽的な感受により、児童が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習を充実」することを基盤に、「音楽的な感受で感じとったことを、表現領域では自らの表現に生かし、鑑賞領域では曲全体のよさを味わう」題材構成について具体的に例示している。この内容をより具体化したのが前述の「指導の重点」ということになる。

また、平成25年4月に刊行された『はばたく群馬の指導プラン(実践事例集)』⁷⁾では、小学校音楽科については、6年生の歌唱の学習の実践事例として、邑楽町立長柄小学校の井戸孝子教諭の授業を紹介している。

この授業実践例をみると、題材の目標を「歌詞の内容や感じ取った曲想を生かして表現を工夫し、思いや意図をもって歌うことができる。」とし、主たる手立てとして児童の「表現したい思いや意図の実現状況」を確認し、それに基づいてよりよい音楽表現にす

る工夫を考える「録音」や「鑑賞」の活動を行なっている。授業者は、児童が、楽曲の「主旋律や副次的旋律、和声の響きなどを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じながら歌う表現を工夫し」、そこから歌う活動に対して「自分の考えや願い、意図をはっきりさせよう」という目的をもって取り組むようにしたい、という指導方針を示している。これは、前述の「指導上の課題」の改善を図るための指導方針である⁸⁾。

こうした「指導上の課題」は、群馬県教育委員会が平成22年度と平成24年度の2回にわたり独自に行った総合的な学力状況調査である「ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査」^{9) 10)}の結果分析から明らかになったと考える。

調査結果に見られる特徴を以下に示す。

【平成22年度調査】

(小学校 音楽 学校質問紙調査結果から)

- 「音楽の授業では、児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしていますか。」という質問に対する回答が、〈肯定的11%〉〈やや肯定的74%〉〈やや否定的15%〉となっており、〈否定的0%〉とはいえ他の質問に対する回答と比べると望ましくない結果となっている。
- 「音楽の授業を行う際に、難しいと感じていることをすべて選んでください。」という質問に対して、「児童が主体的に学習に取り組めるような授業の進め方がわからない」という回答が29%もあり、5年生では音楽の専門的知識を持つ専科の教員が授業を行うことが多いわりに課題性がある。

(小学校 音楽 児童質問紙調査結果から)

- 「音楽の学習は好きですか。」という質問に対する回答は、〈肯定的46%〉〈やや肯定的37%〉〈やや否定的12%〉〈否定的5%〉であるのに対して、「自分がどう歌いたいかを考えて歌っていますか」「自分が(楽器を)どう演奏したいかを考えて演奏していますか」「音楽をきくとき、その音楽のよさや美しさを感じ取ろうとしていますか」などの質問に対する回答の分布がすべて低く否定的な傾向になっていることや、「普段の生活の中で音楽をきいたり表現したりするとき、音楽の授業で学習したことを思い出すことがありますか。」という質問に対する回答に至っては、24項の質問中最も否定的な結果であった。

【平成24年度調査】

(小学校 音楽 学校質問紙調査結果から)

- 「表現や鑑賞の学習において、児童が、音楽を形作っている要素の働きと曲想との関わりを感じ取ること

ができるような指導をしていますか。」という質問に対する回答が、「肯定的56%」「やや肯定的39%」「やや否定的5%」「否定的0%」である。「楽譜を見て階名を歌ったり、楽器の基礎的な奏法をきちんと身に付けたりするなど、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る活動をしていますか。」という質問に対する回答の結果が「肯定的65%」「やや肯定的35%」「やや否定的1%」「否定的0%」であることと比較すると、肯定的な比率が低くなっていることがわかる。

(小学校 音楽 児童質問紙調査結果から)

- 「音楽の学習は好きですか。」という質問に対する回答は「肯定的39%」「やや肯定的38%」「やや否定的17%」「否定的6%」となっており、前回調査と比較して低下している。また、「授業で音楽をきいて、その音楽のよさや美しさを言葉で表すことができますか。」という質問に対しての回答は、「肯定的23%」「やや肯定的47%」「やや否定的24%」「否定的6%」であり、他の質問と比較してもかなり低くなっている。

このように、群馬県の小学校音楽科においては、「音や音楽を通して子どもたちの思いや意図を引き出したり表現のよさを実感させたりする」ことや、「子どもたちが感じ取ったことを生かして、音楽を形づくっている要素を手掛かりに音楽的な特徴を捉えさせる」ことに重点を当てた指導の改善を図ることが、大きな課題となっていることがわかる。この課題の解決を図ることは、新学習指導要領の目標である「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力を育成する」ためにも、極めて重要であり、一層の指導の工夫や改善が求められているといえる。

(3) 小学校音楽科での「金管楽器」に関する学習について

小学校音楽科の学習における「金管楽器」の扱いについて、現在、群馬県内で最も多くの小学校で使用されている教育芸術社の教科書¹¹⁾をみると、次のような単元(題材)構成がなされている。

【3年生】

単元「いろいろな音のひびきをかんとろう」

- ①「おかしなすきな まほう使い」の歌唱を通して、歌詞の一部に出てくる「まほうの音楽(音)」をつくる。その際には歌詞の意味を考えて、それに適した音楽(音)になるようにする。
- ②「まほうの音楽」づくりは、基本的には打楽器を用いる。但し、演奏方法は児童が工夫することが大事で、その楽器本来の演奏方法でなくてもよく、リズムも

自由にする。さらに、音を重ねて楽曲中に3回出てくる「まほうの音楽」の機会には、多様な表現ができるようにする。

- ③以上の学習経験をもとに、重なり合う楽器の音の響きを感じ取りながらリコーダーで演奏する器楽の表現の学習などに進む。具体的な例としては部分2重奏にするなども発展的に考えられる。
 - ④以上の学習経験をもとに、金管楽器が演奏する楽曲をトランペット3重奏やホルン2重奏で聴く鑑賞の学習をする。その中で、その楽器の音色の特徴や楽曲の感じについて話し合うなどの活動をする。
- なお、トランペットやホルン以外の主な金管楽器であるトロンボーンやチューバは、発音の仕方が同じの同族楽器として写真で紹介されている。

【4年生】

単元「いろいろな音のひびきを感じ取ろう」

- ①3年生の時の学習経験をもとにして、フルートとクラリネットという2種類の木管楽器の音や音色の特徴を感じ取りながら演奏を聴く。
 - ②「音のカーニバル」の歌唱を通して、決められたリズムに沿って打楽器(膜鳴打楽器・木製体鳴打楽器・金属製体鳴打楽器)の演奏を加え、音色の変化や曲想の変化などを感じ取り、工夫して演奏する。
 - ③打楽器の簡単なアンサンブルの演奏を通して、強弱の変化や音色の組み合わせの変化などを表現し、音の特徴をはっきりさせる工夫をするなどの活動から「音楽づくり」を意識する。
 - ④複数の鍵盤打楽器や鍵盤ハーモニカなどを用いて「茶色の小びん」の合奏をする。
- なお、クラリネットとフルート以外の主な木管楽器であるピッコロ・オーボエ・イングリッシュホルン・ファゴットは、発音の仕組みの違いとともに写真で紹介されている。

以上のことから、小学校音楽科の学習においては、打楽器・金管楽器・木管楽器ともに「いろいろな音のひびき」の学習で紹介されていることがわかる。また、管楽器は単体の音色や同種類の楽器による重奏は扱われているが、複数種類の楽器編成による金管アンサンブルは取り立てて扱われていないことがわかる。木管アンサンブルも同様である。

(4) 金管アンサンブルの教材的価値について

本研究は、金管アンサンブルで演奏された楽曲の鑑賞を中心的な活動とする授業を構成することで、小学生が「いろいろな音のひびき」を多面的に聴きとり、その「ひびきの感じ」を発表したり話し合ったりする活動を行うによって、「児童が感じ取ったことを生か

して、音楽を形づくっている要素を手掛かりに音楽的な特徴を捉えさせる」学習の充実を図ろうとするものである。

児童にとって金管楽器は、学校での金管バンドの活動などを通して親しみやすい楽器である。中学校以降での吹奏楽部活動でも金管楽器が活躍する場面は多く、またオーケストラの楽器としても打楽器とともに身近なものといえる。

金管楽器の特徴は、第一にその発音方法である。マウスピースを用いて演奏者が口唇を震わせて音を出す。種類や大きさが異なってもその発音方法は同様であり、その点は木管楽器とは異なる。第二に、楽器の大きさや管の太さ、形状の相違により、各楽器の個別の特徴を持ちつつも、同様の発音原理による音色の親和性を生かして、組み合わせることで豊かな響きの表現ができる点である。すなわち金管アンサンブルは、楽器編成により多様な形態や人数の組み合わせが可能だと言える。主として、トランペット、トロンボーン、ホルン、ユーフォニアム、チューバの5種類の楽器を組み合わせた編成が中心である。

一方で、木管楽器と比較すると、音色の特徴が明確に聴き取りにくい面がある。つまり、一つひとつの楽器の音色を聴き分けるのは難しく、アンサンブル全体での響きを楽しむことに適している。このことから、小学校音楽科の学習で金管アンサンブルを取り上げる場合は、それぞれの楽器の音色の特徴だけでなく、アンサンブル全体のひびきを聴きとらせることが効果的であると考える。

表1は、教育芸術社の教科書¹¹⁾の3年生から5年生までの「鑑賞用CD」の収録曲から、管楽器に関わる楽曲等を一覧にまとめたものである。

表1

管弦楽曲	【4年】「動物の謝肉祭」から白鳥、「アルルの女」第2組曲、管弦楽組曲、「新世界」第2楽章、「カルメン」間奏曲、「ペールギュント」第1組曲、「ガイヌ」から剣の舞 【5年】「動物の謝肉祭」から象、威風堂々、ノルウェー舞曲、「軽騎兵」序曲
管楽器による協奏曲等	【3年】トランペット吹きの日、トランペットヴォランタリー、ホルン協奏曲 【4年】クラリネットポルカ、ピッコロ協奏曲

弦楽合奏	【3年】ドイツ舞曲より、アイネ・クライネ・ナハトムジーク第3楽章 【5年】アイネ・クライネ・ナハトムジーク第1楽章、ホルベルク組曲、ピチカートポルカ、
管楽合奏(アンサンブル)	【3年】「旧友」(吹奏楽)、イージー・ウィナーズ、バイエルンポルカ(独奏トロンボーン&管楽) 【4年】「ディベルティメント第5番」第4楽章(2Cl・1Fgのアンサンブル) 【5年】双頭の鷲の旗のもとに(吹奏楽)、ワシントンポスト(吹奏楽)、「第5組曲」第3楽章(吹奏楽)
管楽器独奏・重奏	【3年】セレナーデ(チューバ)、12の二重奏曲より(ホルン)

教材として管楽器に関する楽曲は各学年で幅広く取り上げられている。また、管楽器によるアンサンブルも3年生から5年生にかけて複数に取り上げられている。但し、吹奏楽による行進曲が多い。純粋な金管アンサンブルはジョプリン作曲「イージー・ウィナーズ」のみであり、木管アンサンブルはモーツァルト作曲「ディベルティメント」のみである。このことから、児童が音楽科の授業で吹奏楽以外の木管楽器や金管アンサンブルを聴く機会は多くはない。

2. 実践研究の概要

(1) 実践研究の概要と学習指導案について

本研究は、合奏した際に豊かな響きが期待できる八重奏による金管アンサンブルの演奏を分析的に再構成し、それを教材化することによって、児童の学習の充実を図ることを目的とした。そこで、教材の汎用性を確かめるためにも、金管楽器について初めて学ぶ3年生、木管楽器について学びを広げる4年生、管弦楽の演奏を聴くことが多くなる5年生の三学年で、同じ教材を用いて授業を行った。

以下の表2は、この授業に関する学習指導案の基本形である。菅生、矢島が基本形を作成し、阿久澤・大島・富岡の3名はそれぞれ指導する児童の学年の違い、目標の違い、実態の違いに合わせて、それぞれ指導案を改編し実際の授業を行った(各学年で改編した指導案は、本稿では掲載しない)。

表2

小学校音楽科学習指導案(基本形)

- 1 題材名 金管楽器のヒミツをみつけよう
(教材：アンダーソン作曲 「クリスマス・フェルティバル」金管八重奏版)

2 題材の構想

(1)本題材の指導内容については以下の通りである。

平成29年度3月に告示された「学習指導要領」(以下、新学習指導要領)の「音楽科」の第3・4学年では、目標が以下のように示されている。

- (1)曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、表したい音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。
- (2)音楽表現を考えて表現に対する思いや意図をもつことや、曲や演奏のよさなどを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3)進んで音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

そこで、本題材の学習では、目標を受けて「曲想と音楽の構造の関わりについて気付く」「表したい音楽表現をするための器楽の技能」「表現に対する思いや意図」「曲や演奏のよさを見出しながら味わって聴く」「様々な音楽に親しむ」などの基礎を培うための学習を構成していく。

そのために、具体的には、第3・4学年で示されているA「表現」の(2)「器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する」で示されている「ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。」に関わる学習を取り入れる。つまり、「(ア)曲想と音楽の構造との関わり」や「(イ)楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり」に着目させながら、「ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な技能」として示されている「(イ)音色や響きに気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能」「(ウ)互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」などを培うための鑑賞的な活動となるようにする。

また、「共通事項」で示されているように「A表現」と「B鑑賞」の指導を関連づけて行えるようにし、「ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと聴き取ったこととの関わりについて考えること」を重視する。なお、「イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること」にも反映できるように学習活動を工夫する。

さらに、「鑑賞教材」を選定する観点として「ア 和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活との関わりを捉えやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の曲」や「イ 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、聴く楽しさを得やすい曲」が示されているので、その点に配慮した教材の選定や提示の工夫をする。

(2)本題材で扱う教材については以下の通りである。

本題材では、上記の目標や内容に迫るための教材として「金管八重奏」の演奏による音楽を取り上げる。前述の「鑑賞教材」の選定の観点として「諸外国の民謡」「生活との関わりを捉えやすい音楽」「人々に長く楽しまれている音楽」「聴く楽しさを得やすい曲」などが示されている。金管アンサンブルは、同じ奏法によって演奏する金管楽器の特徴を生かしたパイプオルガンのような重厚で多彩な音色が可能な演奏形態である。輝かしさや明るさはもちろんのこと、暖かみのあふれる優しい音色も表現することができると共に、人の声とも調和しやすく、小学生児童にとってもなじみやすい。「金管八重奏」は、金管アンサンブルとしては大編成であり、同じ楽器が複数にあるために和声的な響きが豊かで、表現の工夫がしやすい。

楽曲は、ルイ・アンダーソンが1950年に作曲した「クリスマス・フェスティバル」を用いる。この曲は、多くの人に聴きなじみのある伝統的なクリスマスの音楽をメドレーにしたものである。曲は「もろ人こぞりて」のメロディからスタートし、様々なクリスマス・ソングが華麗な管弦楽の響きで登場する。「きよしこの夜」「ジングルベル」などを聴くうちにクリスマス・シーズンの楽しさが感じられ、聴き手の心を躍らせるような効果がある。最後のマエストロの部分はオルガンも加わり、壮大できらびやかな祝祭的な世界で曲が閉じられる。この作品は、管弦楽版、吹奏楽版、その他の編成と様々に編曲されて演奏されている。特に、管弦楽版はクリスマス・シーズンには様々な場所で耳にすることが多く、児童にとっても関心を持って楽しい学習ができると考える。

(3)本題材の指導にあたっては、次の点に留意する。

- ① 児童に提示する「学習のめあて」は、「金管楽器のヒミツをみつけよう」とする。「探究型」の学習、児童にとって意

欲や関心を高め主体的に学習に取り組めるものである。児童が主体的に活動に取り組む中で何か新しい理解を得ることは有意義であり、特に好奇心の旺盛な小学生にとっては、「ヒミツをみつける」というめあては、学習に取り組みやすくなるを考える。

- ② 教材として用いる楽曲の特徴を生かした教材化を行う。この楽曲はメドレーによる作品であるために、いろいろな特徴を持った短い曲やフレーズがつながった構成になっている。また、それらは一曲一曲が独立した曲であるために、短いフレーズでも楽曲の特徴を捉えたり、演奏の特徴を捉えたりしやすい効果がある。それを生かした学習になるように工夫する。
- ③ 教材として用いるパワーポイントに挿入する各スライドでは、それぞれの金管楽器の特徴が生きよるような組み合わせによる演奏を用いる。複数の同じ楽器で演奏したり、音色の違う楽器を組み合わせさせて演奏したりして、児童の気付きを支援する。また、児童の関心を高めるために、スライドではアニメーションの効果を活用して、楽器の名前などを当てるなどクイズ的な楽しさを味わえるようにする。
- ④ スライドでは、それぞれの楽器だけだと大きさや特徴が児童に捉えにくいために、比較することができる画像や動画などを効果的に用いることによって児童の理解の深化を図るようにする。
- ⑤ 学習の最後には、児童が自分自身の学習をふりかえることができるような場面をつくり、自分で発見したことを確かめられるようにする。その後、楽曲全体の演奏を聴くことで、音楽全体としての構成を理解できるようにする。
- ⑥ 本時では、内容と時間との関係から、児童の表現の場が少なくなりがちなので、児童がメロディを口ずさんだり、手拍子などのボディーパーカッションによってリズムを一緒に演奏したりする場面での活動を重視する。それによって、主体的に学習に取り組んでいく意識を高めると共に、楽器の特徴について知識的な理解になってしまわないように配慮する。

3 題材の目標

- (1) 金管八重奏で使われている楽器の特徴や音色や演奏の仕方を知ると共に、楽器同士の組み合わせで、楽曲にはいろいろな音楽的な特徴が表れることの鑑賞を通して理解する。
- (2) 楽曲は、主旋律だけでなく副次的な旋律や伴奏などが組み合わさって成り立っていることに気付き、歌ったり身体を動かしたりすることなどを通してそれぞれが聴き取ったことを発表し合う。
- (3) クリスマスのシーズンの到来を感じ、音楽と季節感との関わりや音楽が心をうきうきさせる効果を持っていることなどを感じ取ることを通して意欲的に学習に取り組む。

4 本時の学習(1時間扱い)

- (1) ねらい 金管八重奏で演奏するクリスマス音楽を聴いて、それぞれの楽器の音色や演奏の特徴を考え、楽しい音楽や暖かい感じの音楽などになるヒミツをみつけて発表することができる。
- (2) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点・具体的な生徒の反応
1. 本時の「学習のめあて」をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ○スライドをもとに、本時の「学習のめあて」をつかませる。 ・「問い」に対して知っていることを発表させ、本時で追究する「ヒミツ」が楽器のかたちや演奏の仕方に加えて、音楽の感じや演奏の工夫などにあることに気付かせる。
2. 「金管楽器」の「なかま」について理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ○「トランペット」から順番に、各楽器の写真や演奏の様子の動画などを見せて、気付いたことを発表させる。 ・特に、音の特徴などに関する意見を採り上げて、楽器に対する関心や音色への関心などを高めるようにする。 ・「楽器そのものの理解」がねらいの中心ではないので、一つ一つの楽器に対する応答に終始しないようにする。 ・範奏に関しては、それぞれの楽器の特徴がよく表れるような楽曲の部分を用いる。
3. 楽曲を構成するそれぞれの曲の中から特徴が対称的な二つの部分を聴き比べて、音楽のヒミツをさぐる。	<ul style="list-style-type: none"> ○「三重奏」による対称的な二つの部分の演奏を聴かせて、それぞれの特徴を発表させ、話し合わせる。 ・「①リズムカルで旋律の動きのある部分」と「②和声的で響きの美しい部分」 ・①の部分は「手拍子」をとって、リズムを体験させる。 ・②の部分は旋律をハミングで歌わせて、和声のこころよさを感じさせる。 ○旋律だけの「ソロ」と主旋律と副次旋律の「重奏」を聴き比べさせる。 ・楽器は何(どんな役割)をしているか。 ・楽器が組み合わさることでのどのような効果が生まれているか。 ○同じ部分を「合奏」したときと感じの違いを体験させる。

4. 全曲の演奏を聴く。	○全曲の演奏を聴き、気付いたことを発表し合う。 ・全曲はやや長いので聴かせ方を工夫する。
5. 本時の学習のまとめをする。	○みつけた「ヒミツ」をノートに書かせる。 ・ワークシートを工夫するなどして、児童の気付きを自ら確かめられるようにする。

(2) 研究実践について

研究実践は以下の3事例である。

事例1 H29.12.13 阿久澤による実践

(小学校3年生)

事例2 H29.12.21 富岡による実践

(小学校4年生)

事例3 H29.12.20 大島による実践

(小学校5年生)

(3) 作成した教材について

表3は、パワーポイント(以下PPTと記す)により作成した教材を示している。なお、丸数字は該当するスライド番号を示す。

表3

【パターンⅠ 3・4年生用】

- ①「金管楽器」のヒミツをみつけよう(学習のめあて)
- ②「金管楽器」のとくちょうは?(金管アンサンブルの写真)
 - どんな楽器があるのか?大きさはかたちはどうか?
 - どんな音がするのか?
- ③・④「金管楽器」のなかま(1)
 - トランペット(奏者の写真)みつけたヒミツを発表する
 - トランペット(演奏動画)どんな音がしましたか?
- ⑤・⑥「金管楽器」のなかま(2)(トロンボーン・同前)
- ⑦・⑧「金管楽器」のなかま(3)(ホルン・同前)
- ⑨・⑩「金管楽器」のなかま(4)(チューバ・同前)
- ⑪・⑫「金管楽器」のなかま(5)(ユーフォニアム・同前)
- ⑬「二つのえんそうをききくらべてみよう」
 - (演奏動画 i トランペット2・チューバ1)
 - (演奏動画 ii ホルン・トロンボーン・ユーフォニアム)
- ⑭「どんなとくちょうがあるか?」
 - (演奏動画 i)てびょうしをしてみよう
- ⑮「どんなとくちょうがあるか?」
 - (演奏動画 ii)いっしょに歌ってみよう
- ⑯「金管楽器の「合奏」のヒミツをみつけよう?」
 - 一人でえんそうするのをきいてみよう
 - どんな感じがしたか?

- (動画 トランペットの独奏)
 - ⑰「金管楽器の「合奏」のヒミツをみつけよう?」
 - いっしょにえんそうするのをきいてみよう
 - どんな感じがしたか?
 - (動画 主旋律と副次旋律 トランペット2・ホルン1)
 - ⑱「金管楽器の「合奏」のヒミツをみつけよう?」
 - 全員にえんそうするのをきいてみよう
 - どんな感じがしたか?
 - (動画 八重奏で演奏)
 - ⑲「はじめから最後まで曲をとおしてきこう」
 - (動画 全曲演奏)
 - ⑳「どんなヒミツをみつけたか?」
 - 学習のふりかえり
- ### 【パターンⅡ 5年生用】
- ①「金管楽器のアンサンブルのヒミツをさぐる(学習のめあて)
 - ②「まず聴いてみよう」(演奏動画 金管八重奏)
 - ③「気づいたことを話し合おう」
 - 楽器や曲のこと
 - 旋律やリズムや音の重なりのこと
 - ④「楽譜を見てみよう」(楽譜の掲載)
 - ⑤「ヒミツをさぐる」(1)
 - それぞれの奏者が一人ずつ演奏したらどうなるだろう?
 - (演奏動画 トランペット1から順次演奏)
 - ⑥「ヒミツをさぐる」(2)
 - 三人の奏者が一人ずつ演奏したらどうなるだろう?
 - (演奏動画 トランペット2・トロンボーン1)
 - ⑦「ヒミツをさぐる」(3)
 - 全員いっしょの演奏をもう一度聴こう
 - (演奏動画 tutti・曲の前半部分)
 - ⑧「ヒミツをさぐる」(4)
 - 曲のちがう部分の演奏を聴いてみよう
 - (演奏動画 tutti・曲の中盤部分)
 - ⑨「ヒミツをさぐる」(5)
 - 曲のちがう部分の演奏を聴いてみよう
 - (演奏動画 tutti・曲の後半部分)
 - ⑩「全曲を聴いてみよう」
 - (演奏動画)
 - ⑪「吹奏楽の演奏と比べてみよう」
 - (吹奏楽版の演奏・写真)
 - ⑫「金管楽器のアンサンブルのヒミツとよさを考えよう」
 - 学習のふりかえり

3. 実践研究のまとめ

(1) 実践の概要と成果

3名の実践については、菅生・矢島が参観し、授業後には各実践者と振り返りの場を設けて話し合った。実践の概要は、主に矢島が記録し、菅生と協議してまとめた。各授業者の「振り返り」は、各授業者が記述したものである。

① 3年生の授業から（授業者・阿久澤）

阿久澤は、勤務校の年間指導計画を基に、PPTの教材を利用して実践した。3年生の発達段階を踏まえ、教師の問いかけに対して児童が応答する一斉授業形態により指導を進めた。

授業者は、児童の反応を丁寧に取り上げるよう心掛け、良い気づきの発言を効果的に取り上げて他の児童の気付きにつなげたり、理解が不十分だと思われる発言は細かくチェックしたりしながら、学習集団全体を対象にして指導を進めた。このことが、金管アンサンブルという演奏形態を初めて知る児童には学習しやすい状況をつくりだした。

また阿久澤は児童との良好な関係性を重視し、児童が安心して学習に取り組めるように努めた。そのため、児童の音楽科の学習に向かう姿勢は落ち着いており、学習への集中力が途切れず、3年生の学習という点では教師の期待に沿ったものとなった。

本時の学習が自作教材を使った研究的な授業であることに配慮し、学習指導案で計画した時間に沿った指導を進めるように心がけた。事前に他の学級で実践し授業を分析しておいたので学習の展開が余裕のあるものになった。

第1番目の中心発問の「各金管楽器の音の特徴」については、3年生児童には「金管楽器」に関する基礎理解が不十分なためにやや難しかった。

阿久澤は、一つ一つの楽器の音の特徴を子どもたちの発言から引き出そうとしたが、児童の語彙から各楽器の音の特徴を表す適切な表現を選択するのは困難さが伴った。授業者は、児童の発言の意図を過度に問い重ねるのは適切ではないとの判断から、学習の流れを重視したが、児童は適切な言葉が見つからなくても、音色を聴くことにつながる聴き取りはできていたと判断される。

第2番目の中心発問の「2種類の曲想の異なる表現

を聴き分けること」については、楽器構成の違いと曲想の違いの2つの要素を合わせて聴き比べなければならない点、児童にはやや難しかった。そのため、阿久澤は、楽器の編成の違いはある程度の扱いにし、曲想の違いを軸にした児童の聴き取りを重視した指導を進めた。その点は効果的であったと判断した。

本時の学習指導案は、1単位時間の中に中核発問を3つ入れる展開であり、授業全体の構成が難しかった。そのことを併せて振り返ると、各活動の処理の仕方はおおむね適切であったと分析している。

第3番目の中心発問の「独奏と合奏の表現の違いを聴き分けること」については、児童の発言から「本時の学習のねらい」の達成ができてきている様子が見取れた。

阿久澤は、8人のアンサンブルを構成することによって音楽的な表現の豊かさが増すことを児童全員に気付かせることをねらい、結果としてほとんどの児童の学習プリントの記述からは気付けたことが裏付けられた。また、4人のアンサンブルのよさを指摘した児童もおり、2種の楽器による4管アンサンブルはとても音楽的であることや、8人のアンサンブルに過度にこだわる必要がないことなどが明らかにできた。阿久澤はトランペット独奏のよさも取り上げた発問をしたが、事後分析では、独奏のよさに児童が気づける活動があってもよいという結論を得た。

以上のことから、本実践では、最後の「感想をまとめて書く」活動でもほぼ全員の児童が集中して取り組めており、発表内容もよく、初めて金管楽器の音に触れた児童の聴き取りは高く評価してよい。

実践した学級の児童の歌唱は、非常に良質の声質で、発声がとてもスムーズで、頭声発声への移行が無理なくでき、音程の大きなずれもなく声が出せていた。歌詞のとらえ方もよかった。

教室前部に掲示してある「感じたことを表すための言葉のヒント表」が有効に機能していた。それを見ることで児童が、表現しやすいことも見取れた。

課題としては、一斉形態のため、児童の発表の中には他の児童に真意が伝わりにくいものが見られた点が挙げられた。

また、3年生の児童には楽器の名称が覚えにくいこと。そのため、5種類の金管楽器の名前は演奏を聴くより前に提示しておき、楽器の音（音色）の特徴を理

解したり表現したりしやすい何らかの工夫を考える必要があること。また、録音状態や再生装置の問題から、特にトランペットの鋭い音が過度に強く聴こえる点は教材の改良が必要である。

さらに、楽器ごとの演奏は、用いた曲目（部分）が異なったため、児童が楽器の音（音色）と曲の感じ（曲想）が整理できない場面もあって混乱を招いた。また、児童には、ホルンの柔らかい音を低い音と認識する傾向が見られた。音色の硬さや柔らかさが、音の高低に聴こえてしまう点は教材研究の不足である。また、3年生児童にクリスマス・ソングはなじみがあると考えたが、児童は何の曲であるか気づかなかった。器楽曲の理解にも歌詞の重要性を認識しなければならない。

一般にわたり、作成した指導案に沿った授業展開が3年生児童に受け入れられることが明らかにできた。

阿久澤の「振り返り」を、以下に示す。

「児童が、思いや意図をもって表現を工夫する素地を養うために、鑑賞の能力を高めることは非常に重要だと考え普段から学習を進めている。今回の金管アンサンブルの演奏の鑑賞において、3年生の児童が音色の特徴だけでなく、複数の楽器が組み合わさることによる響きの充実などに気付けた点は、今後より深い学習を模索していく上でも重要なヒントになるとことが明らかにできた。実践を通して、金管楽器のそれぞれの音色だけでなく、アンサンブル形態での演奏が教材的に有効であり、価値をもっていることが明らかにできたと考える。また、最後の全曲演奏は演奏時間が長いため、「感想や学習からつかんだことをシートにまとめる」時間のBGM的に活用したが、これも効果的であったと考える。音楽科の学習の振り返りの際に音楽を聴きながら考えるのは効果的である。」

② 4年生の授業から（授業者・富岡）

富岡は、児童の学習経験を生かして学びを深めるために、基本形で示した学習指導案を単元「いろいろな音の響きを感じ取ろう」（10時間）として再構成した。

その視点は、「音色」「響き」「曲想」などの音楽的要素を楽曲や演奏から観点ごとに聴き取ることについての4年生児童の困難度を単元の再構成を行うことで解決しようとするものである。実際に、授業の後半では、和声上の複数の声部の聴き取りに対して児童の学

習の様子は質的に優れていたが、これは、10時間構成単元の発展的な扱いとして授業を位置づけたことも影響していると考えられる。

富岡は、児童に鑑賞教材を繰り返し聴かせている。児童の耳は聴き込むことによって育っていくが、それは日頃の授業での学習習慣の形成によって鍛えられるものであり、教材を聴き込む過程を通して、児童が主体的に多様な聴き方を行っていると考えられる。さらに、時間を十分にとって徹底して気付きや考えを書かせる活動がそれを支え、児童の表現力の育成につながっていくと考える。

また、日頃のノート指導により、児童自身が音楽ノートを考える場として活用していた。書くことで児童は自分の考えを整理したり構造化したりし、メタ認知的な学習方略として有効性がある。また、教師が座席表を活用して児童の実態把握を机間巡視の間に丁寧に行い、児童の思考の変容をよくとらえている点も児童の学習の質を高めている。

発問についてもメリハリをもたせ、特に、中心発問は丁寧に行った。指導者と児童との関係性は良好であり、自分の考え方に自信がない児童でも安心感を持って学習に臨んでいた。軽度発達障害を持つと思われる児童も落ち着いて学習に取り組んでいた。

実践のポイントは、次の点である。

第1点目は、「ジングルベル」と「きよしこの夜」の楽曲の比較である。2曲は対照的で「曲想の違い」は捉えやすいが、それと「リズムの違い」「テンポの違い」などの諸要素との関連に児童が気づくことを狙った。加えて本教材構成では、演奏形態の違い、演奏に用いる楽器構成の違い、同声部を複数楽器で演奏、などの点により聴き分けが困難な面があるが、本時の学習ではそれをあえて学習課題とすることで、児童の発言や話の質を高めていた。

第2点目は、4声部の讃美歌を巧みに使って児童の追究活動の組織化を図った点である。和声的な4声部の楽曲の特徴を生かしながら、児童の反応を組織して追究を進めさせた。その結果、児童は「響きの厚さ（薄さ）」や「楽器の特徴を生かした役割分担」などに気付いた。これは4年生児童の気付きとしては非常にレベルが高いと考える。

課題としては、児童の能力差の顕在化が挙げられる。児童の学びの質が高くなると能力差も目立ってく

る。質の高い発言の意味が分からない児童も見られた。

また、再生装置の問題からトランペットなどの高音楽器の音質が硬くなってしまい、金管楽器の持つ豊かな音色を十分に再現できなかった点は、教材作成の見直しが必要である。

一般にわたり、作成した指導案に沿った授業展開が4年生児童に受け入れられることが明らかにできた。とりわけ、高度な追究活動が展開できた点は成果である。

富岡の「振り返り」を、以下に示す。

「教材を見直し、範奏をより短いフレーズのものに変えて活用したのは効果的だったと考える。児童が、クリスマスの音楽についてよく知らないことは事前に実態把握の不十分さであった。最後の全曲演奏は、演奏時間が長くなりすぎており再考が必要である。本単元を再構成し、金管アンサンブル教材を打・木管楽器のひびきの発展的な学習として位置づけたことは学習の深まりに効果的であった。また、金管楽器の音色の微妙な違いや演奏の様子を感じ取らせることや、旋律の役割やそれぞれの旋律が重なった際の音の厚みなどを感じ取らせることの可能性に気付くことができた。管楽器のアンサンブルは高い教材性を持つといえよう。金管アンサンブルという演奏形態は、授業者のねらいや意図に応じて様々な使い方ができる。広がりや豊かさのある音楽的素材であると考え。」

③ 5年生の授業から（授業者・大島）

大島は、5年生にとって金管楽器や木管楽器は既習事項ため、各楽器の音色や奏法の特徴ではなく、アンサンブルという音楽形態の特徴やよさを学習することをねらいとして指導案を再構成した。

大島は、音楽科学習として大事なりズム感やグループ感などに着目し、「音楽する楽しさ」を基盤に据えている。そのため、発声の練習をはじめ、身体全体の動きでリズムを感じる活動、グループで学習の一体感を高める活動、歌唱では、音程感だけでなく様々なりズムやテンポ、フレーズなどの音楽的要素をもとにしたウォーミングアップの活動を十分に行って児童の学習に対するレディネスを形成するよう心掛けていた。それ故、児童の音楽科学習への意欲は高く、音楽的活動を楽しんでいた。児童は、音楽活動に元気良く取り

組み、質の高い歌唱表現を生み出していた。

大島は、「曲想や曲の場面などの様子を表すために何をするのか」という発問から学習のめあてをつかませた。特に、5年生児童は6年生児童が取り組んでいる金管楽器と打楽器と鍵盤ハーモニカで構成する「マーチング」に高い関心を示しているため、これまで取り組んできた合唱と関わらせながら金管アンサンブルの「ヒミツをさぐっていこう」と働きかけ、児童の追究意欲を高めていた。

授業では、3～4人のグループで話し合いながら進めていくスタイルをとり、児童に考えや感じたことを素直に出し合わせていた。

大島は、各種のカードによる学習のヒントの提示を手立てとして用いて、効果を上げていた。児童は、音楽室の壁面の様々な掲示を随時的に見て学習のヒントを得ていた。また、各グループにA3判の3枚のカードが配られ、そのまま気付きをメモとして書き込めるようにするなど教具も工夫していた。

課題としては、5年生児童は、実際にはまだ金管楽器の演奏をしたことがほとんどないため、楽器の構造についてはよく理解できていない点が見られた。小学校においても児童が実際に触って楽器の構造が理解できるよう実際の楽器を教具として準備する必要がある。

また、児童は、熱心に演奏の様子を視聴していたが、5年生とはいえ、金管8重奏から各楽器の音を聴き分けるのは難度が高く、各楽器の音色のイメージ化は難しかった。そのため、音色と曲想とを関連付けて考えるのが難しくなり、児童の発言が断片的になりがちであった。楽器ごとの音色の違いを比較する上で、楽器ごとに演奏するフレーズが違っていった点は、教材作成の課題である。

一般にわたり、作成した指導案に沿った授業展開が5年生児童の学習でも有効に機能することが明らかにできた。

大島の「振り返り」を、以下に示す。

「既習の合唱での学習を活かして、金管アンサンブルと合唱には同じ要素があることに気付かせたいと考えていた。それにより、中学生以降の学びでは、曲想と各楽器の音色の特徴を関連させたり、楽曲の特徴とアンサンブルの構成を工夫したりするなどのことができる」と考える。

教材の問題点としては、特に、ホルンやトロンボーンなどの中音域の柔らかい音色の聴き取りが難しい点がある。また、ユーフォニアムは児童にとっても初めて目にする楽器であり、その音色のイメージがつかみにくいようであった。スピーカーをパソコンに接続して、できるだけ良質な音質になるようにしたが、五重奏の楽譜を部分的に八重奏にしているので、同種の楽器の重奏の表現が聴き取りにくいようであった。編曲についても改善の余地がある。とはいえ、金管アンサンブルによる楽曲の鑑賞は、児童が感じ取ったことを活かして、音楽を形作っている諸要素を手掛かりに、音楽的な特徴を捉える学習につながると考える。管弦楽曲の鑑賞教材であるホルストの「木星」による学習と本時の学習を組み合わせることで、響きの良さに視点を当てて、児童から楽器の特徴を生かして主になる楽器と他の楽器を目立たせる楽器とを使い分けることや、拍の流れを変えて聴き手の想像に変化を与えることなど、音楽を構成する要素に着目した発言を引き出すことができた。また、八割以上の児童に音色の変化のよさについて自分の考えをもたせたり、曲全体を味わって聴かせたりすることができたのは成果である。」

(2) まとめ

本研究では、金管アンサンブルが小学校中学年から高学年の音楽科の学習でどのような効果があるかについて、教材の自作をもとに、3名の小学校音楽科の担当教員の実践を通して検証した。教材作成にあたり、前年度に行った中学校音楽科における木管五重奏による教材作成と実践研究を活用し、また、平成32年度から完全実施される新小学校学習指導要領の目標や内容を踏まえて行った。

その結果、3つの実践の授業記録からは、ほとんどの児童が意欲的に学習に取り組み、音や音楽に能動的に関わろうとする態度が高まったことが見て取れる。管弦楽など大編成の鑑賞教材は漠然と聞こえがちであるが、本実践ではアンサンブル形態を用い、授業者による再構成可能な教材形式の活用により、3～5年生の児童はそれぞれの金管楽器の音色には特徴があることによく気付いていた。さらに楽器の組み合わせによって音楽表現が豊かになることに気付けたのは成果であった。そうした聴く態度が、音を重ねると響きはどうか変化するかを聴き取りたいなどと高次化していく

ことで、鑑賞能力の育成に大きく影響するであろうことも分かった。また最近では、児童が疑問に感じたことをもとにした「～はどのようにしたらよいのか」などの問いのある「めあて」の重要性が指摘されているが、本題材は音楽科におけるそうした問題解決型学習を促すための一つの方策になると考える。

一方で、教材については、素材とする楽曲の選定も含めてより工夫すべき点が多く見出された。PPTに動画を組み込んだ本教材はスライドの改編・再構成を用意する点では汎用性が高い反面、再生する音響機器の検討の重要性は実践者の「振り返り」からも見て取れる。

4. おわりに

本研究は、授業実践はもちろんのこと、教材作成も実際に学校で児童生徒を指導している音楽科担当教員で行った。こうした取組は音楽科教員の研修と職能成功にとっても有意義なものになると考える。

なお、本研究を行うにあたり、研究協力者としてビデオ教材のための「金管八重奏」の演奏をしてくださった以下の先生方に深く感謝する。(敬称略)

松井知世(安中市立東横野小学校教諭・トランペット)、橋詰詩織(県立太田女子高等学校教諭・トランペット)、山真理(富岡市立小野小学校教諭・ホルン)、高橋美南(甘楽町立小幡小学校教諭・ホルン)、土屋瑠唯(高崎市立倉賀野中学校教諭・トロンボーン)、齋藤ゆかり(太田市立尾島小学校教諭・トロンボーン)、金井由樹(桐生市立商業高等学校教諭・ユーフォニアム)、小川唯佳(学校組合立利根商業高等学校教諭・チューバ)さらに、授業研究にあたり協力していただいた玉村町立上陽小学校、富岡市立一ノ宮小学校(富岡の前任校)、藤岡市立藤岡第一小学校の学校長はじめ関係者の皆様にも深く感謝したい。

参考文献

- 1) 大須賀真理・佐藤美咲・立花彩香・宮澤侑里・柳田智子・菅生千穂・矢島正 「中学校音楽科『木管五重奏』の教材化」群馬大学教育実践研究 第35号 (平成30年1月)
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領 (平成29年3月)
- 3) 文部科学省 小学校学習指導要領解説 音楽編 (平成29年7月)
- 4) 日本教材システム編集部編「小学校学習指導要領新旧対象

比較表」(2017) 日本教材システム

- 5) 群馬県教育委員会「平成30年度 学校教育の指針」(平成30年4月)
- 6) 群馬県教育委員会「はばたく群馬の指導プラン(指導の手引き)」(平成26年3月)
- 7) 群馬県教育委員会「はばたく群馬の指導プラン(実践事例集)」(平成25年4月)
- 8) 群馬県教育委員会「はばたく群馬の指導プラン」(平成24年)
- 9) 群馬県教育委員会「ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査結果報告書」(平成23年4月)
- 10) 群馬県教育委員会「第2回ぐんまの子どもの基礎・基本習

得状況調査結果報告書」(平成25年4月)

- 11) 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎監修 小学校音楽科教科書「小学生の音楽3・4・5」(平成27年2月) 教育芸術社

使用楽譜

ルロイ・アンダーソン(クリス・アーノルド編曲)「クリスマス・フェスティバル」(金管五重奏編曲版) Hidalgo Music
 ルロイ・アンダーソン「クリスマス・フェスティバル」(吹奏楽用編曲版) Alfred Publishing

(すごう ちほ・やじま ただし・あくざわ ゆか・
 おおしま けいこ・とみおか ちはる)

